



新幹線
南海部覚悟

目次

(プロローグ)	1
(1)	3
(2)	5
(3)	7
(4)	9
(5)	11
(6)	13
(7)	15
(8)	17
(9)	19
(エピローグ)	21

(プロローグ)

——JR 広島駅新幹線ホーム。

下り 12 番乗り場の中央付近に、制服姿の駅員が小走りで集まってきた。

担架を抱えた救急隊のユニフォームも、何人か交っている。

当駅止まりの『のぞみ 75 号』から連絡があった。

車両の一部に不具合発生、乗客に複数の怪我人が発生している旨、緊急の対応が必要となっていた。

群青色に暮れなぞむ岡山方面の先に、二つの白い光芒が近づいてきた。

瀬戸内のヨードを含んだ潮風と共に、列車がホームに進入してくる、ディスクブレーキの鋭い金属音が響き渡って、ゆっくりと停止した。

9号車のドアが開いて車掌2人が降りてくる、直ぐに救急隊を車内に誘導する。

数分後、担架に横たわる2人の怪我人を、ホームで待機していた2台のストレッチャーに固定して非常用 ELV に急ぐ、家族と思しき数人が荷物を抱えて後を追いかけてゆく。編成の前方からのもう一台を加え、やがて駅のホーム下から、救急車のサイレン音が重なった。

乗客の降車が一頻り終わった辺りで、2人の駅員が車両に沿って歩きながら何やら話している。

「——やっぱり、この前と同じだな。」

「先頭車両の停止位置は、ピッタリなんだが、後に行くにつれて少しずつズレてる……。」

「連結の緩衝器がおかしいのか？」

「この編成は、半月前に全般検査を終えたばかりだ、緩衝器がおかしけりゃ取り替えてるだろう。」

「不具合のあった車両は？」

「9号だそうさ、総合指令所のモニターにアラームが表示された。」

車内に入ると、客室チェック中のスタッフと出会う。

「——客室に異常はないか？」

「これとっては無いんですが……。」

と初老のスタッフが戸惑った表情になる。

「どうした？」

「もう2年以上、この編成の客室チェック担当してるんですが・・・今日は9号車に少し違和感があるんです。」

「——違和感？」

「車内をテンポよく確認するために、いつも通路を歩く歩数を心の中で数えるのですが、今日は歩数が足りない・・・靴先半分ほど、歩数が足りないんです！」

(1)

——広島市横川、奥寺が暮らすマンションの一室。

リビングの西側の壁、床から天井まで一面の棚に、小さなサボテンの鉢が無数並べられ、鳥の巣頭の住人が甲斐々しく手入れをしている。

棚の一番奥に拳大の石塊が薄紫に輝いて、場違いな華やかさを醸し出していた。

「——これ見覚えがあるわ！ ずっと前、京都北山の菩提寺にあった水晶のジオード？」
勤務明けに油を売りに来ていた笑子が、甲高い声を上げた。

「アメジストのジオードだよ、あの事件のあと森林組合から、事件解決のお礼だと言ってSRIに送ってきてくれたんだ。京都府警が要らないって言うから、僕が貰い受けた。」

「あの住職や一族の特殊能力について、あれから何か分かったの？」

窓際のカウチで紅茶を啜りながら、玲子が振り返った。

「特殊能力のエネルギーの根源は、何れも常温プラズマの核融合反応なんですけど、どうして常温プラズマが生成されるのか、専門家の間で様々な仮説があって、未だよく分かっていないようです。」

サボテンの手を休めて、奥寺が説明する。

「重水素や三重水素の原子が、高温環境下でイオン化したのが通常のプラズマで、それを更に熱して裸の原子核同士をぶつけて、熱核融合が実現するんですけど、常温プラズマでは何らかの理由で核内に電子が取り込まれているようなんです。」

「どういう事？」

「原子核に電子が落ち込むと、電荷が中和されてクーロン力が働かなくなります。低エネルギー環境下でも、頻繁に原子核同士が衝突して核融合が実現します。」

「あなたの言ったた、何たらフューザーとはまた別の反応？」

思い出したように玲子が尋ねる。

「フューザーの核融合も高エネルギー環境下での産物です、反応がほんの一瞬で連鎖性がないから入力したエネルギー以上の利得が得られない・・・。」

「——原子核に電子が落ち込む理由が分からないってこと？」

「通常、原子核内部の電子の存在確率は限りなくゼロなんです。核内部から陽電子が放出されたとも考えられるんですけど、重水素や三重水素じゃあり得ない・・・。」

短い沈黙が、部屋を満たす。

「まあ、これ以上は私も分野外ですから、偉そうに知ったかぶりで説明も出来ないから、やめときますが・・・そうそう、もっと現実的でもっと奇妙な話が別にありますよ。」

上空の群青が一層深く沈み、窓の外の足元の灯りが瞬き始めた。

「私の友人で、新幹線の整備やってるのがいるんですが、最近列車が入庫する度に、編成の総延長にばらつきが出るって言うんです……。」

その時、玲子の携帯に着信があった。

「臨場要請よ、広島駅で事件らしいわ！」

(2)

鉄道施設・鉄道車両全般を管轄する鉄道警察隊は、各県警の支配下にある。

本来、鉄道駅構内は初動において県警刑事部の管轄外であるが、この日は警備部と共に臨場を要請された。

半月前 JR 西日本本社に宛てた、新幹線爆破予告に対応しての、警察庁指示かと思われた。

3名の車掌、グリーン車担当の女性パーサー1名の、乗務報告を兼ねた事情聴取が広島駅の会議室で始まった。

玲子と笑子が立ち会っている。

「救急搬送された3名のお客様のうち、残念ながらおふたりが亡くなられた旨、連絡を受けています。もうおひとは重症では有るものの、命に別状は無いとのこと。軽傷をも含めその他のお客様に傷害はありません。」

駅員の一人が報告した。

「編成はどうした、不具合があったんだろう？」

幹部駅員が確認する。

「広島車両基地に回送しました、不具合がモニターされた部位の調査が始まっています。」

幹部駅員が乗務員4名に向き直った。

「何があった？ 順を追って説明してくれ。」

チーフ乗務員という初老の車掌がゆっくりと話し始めた。

「——三原駅を定刻に通過して5分ほど経過した辺りです、急に外が暗くなって車窓に稲光が走り始めました。私はそのとき8号車を巡回していたのですが、強い衝撃があって車内がざわついたんです。てっきり車両か近くの施設に落雷でもあったと思い、安全である旨お客様に伝え、落ち着いて頂きました。その直後9号車から複数の悲鳴が上がったんです！」

「ちょっと待て、強い衝撃ってどんな衝撃？」

訊かれた車掌は、思い返しながらかし間を置いて続ける。

「・・・金属がぶつかる衝撃、そう！ 連結器の衝動のようでした。」

「新幹線の連結器に衝動があるとは思えませんが・・・まあ続けて。」

戸惑いながら、更に続ける。

「慌てて9号に駆け込むと、2番の通路と座席の間に、お客様がふたり倒れていました。」

沈み切った会議室に重い空気が漂う、後方で誰かが咳き込んだ。

(3)

「——被害者に外傷は？ 床に血は流れていましたか？」

笑子が手を挙げて質問する。

幹部駅員が質問に割って入る。

「すみません刑事さん、説明がまだでした。」

乗務員に対し、鉄道警察隊に加えて県警刑事部の事情聴取を兼ねている旨説明された。

「何れのお客様も、血を流されるようなことはありませんでした・・・。」

細い声で女性パーサーが呟いた。

「9号はグリーン車ですので、私の担当です。亡くなられたお客様は何れも男性で2Aと2Dにお座りでした。強い衝撃があった瞬間・・・見えたんです。」

「——どうした、何が見えた？」

全員固唾をのんでパーサーの声を待った。

「客室の空気が白くなって・・・ふたりのお客様の体が、前後に潰れたんです。」

広島市東区の新幹線車両基地、長い建屋に400mの列車編成が、白く横たわっていた。

車両に沿うメンテ用の長い通路を、職員に先導されながら奥寺が歩いている。

「ここは正式には、広島新幹線運転所といいます、昔は運転士を含めた乗務員の詰所でした。検修部門もありますが、今は博多総合車両所所属となっています。」

親切な職員が時々振り返りながら説明する。

「ご存じかとは思いますが、現在新幹線に運転士は乗車しておりません、全列車東京の総合指令所からの遠隔運転となっております・・・。」

「完全な遠隔運転が可能となったのは、全列車の鉄輪式リニアモーターへの置き換えが完了した為です。」

「——どういう事ですか？」

四角い車窓の連続に、うんざりし始めた奥寺が顔を上げて訊き返した。

「リニアは車輪の粘着に頼らない動力で、精密な遠隔制御が出来るようになりました。まあそれまでは新幹線といえども、マスコンやブレーキレバーに伝わる感覚で、運転士が制御している部分が多少ともあったので。」

「新幹線リニアは地下鉄と違って超電導コイルだと聞いています、どうしてですか？」

「地下鉄などのリニアモーターは、枕木に設置されるリアクションプレートとのクリアランスが12mm程度です。重いコイルを車軸の下（ばね下）に取り付ける必要もありました。300km以上で走る新幹線では何れも許容出来ません。」

「そこで新幹線では、高温超電導コイルを採用しました。三相交流コイルですので、一回の印加で電流が流れ続けるわけではありませんが、リアクションプレートとの許容クリアランスを約 30 倍に設定できるようになりました。」

(4)

歩いている足元が急に明るくなった。

20 人程が車両床下の機材に取り付いて蠢いている。

「——何か解りましたか？」

先導した職員が床下に声を掛ける。

「電力系のユニットに異常はないようだ！」

「集電も、問題なしです！」

頭上からも声がする。

「——車掌が雷鳴聞いてるんだよな！」

野太い唸れ声がタラップを登ってきた。

「総合指令所のモニターにアラームが表示されて、すぐに復旧したらしいから、ライトニングサージに間違いないと思うんだが、弱電ユニットにも、電力系にもそれらしい痕跡がない。念のため超電導コイル冷却ユニットも今から診るが関係ないと思う。」

唸れ声が捲し立てた。

「——台車は？」

連結部分から下を覗き込んでいた奥寺が呟く。

「台車に不具合出たら、駅まで戻っちゃこれねえよ、刑事さん……。」

9 号車の車内に入ると、先行して臨場した SRI スタッフが、犠牲者が倒れた座席の周囲を捜査している。

奥寺の姿を見ると、一人が立ち上がってシートの座面を指さした。

「ファブリックが同じ位置で直線状にささくれているな、下手な掛け継ぎのようだ。血液反応は無かったか？」

シートの前にしゃがみながら奥寺が確認する。

「——ありません、薬品や電撃による焦げ跡も一切見当たりません。それよりもこれを見てください。」

シートのささくれを伝って窓のある内壁を立ち上がる、化粧パネルのテクスチャーがそこだけ微妙に異なる、窓ガラスの真ん中を上下に貫いて、僅かな屈折異常が確認できた。

「こんなのが、壁から天井を廻って一周しているんです。今まで見たことありません。」

「この座席の真下は？」

「——台車です！」

JR 職員が呟いた。

玲子の携帯に着信があった。

「——穴見先生がすぐ来てくれて、新幹線の犠牲者2名の検死結果らしいわよ。」

聞いた笑子が顔を顰める。

「——またあのモルグ番人！」

大学病院の法医学研究室を訪ねると、穴見は自室でいつもの電子タバコをふかしていた。

「ついさっき行政解剖が終わったの、二人のご遺族とも急なことで動転していたけど、何が原因なのか、知りたがってたわ。」

「——何が原因だったんですか？」

ぶっきら棒に笑子が尋ねる。

「あんたねえ、人にもものを訊く時くらい・・・生体組織の欠損よ！」

玲子が笑子を宥めながら、女医に話を続けさせた。

「薄い板状に体の組織が欠損しているの、そして残った組織がそのまま癒着している・・・こんな症例初めて診るわ。」

「よく解りません～」

コケティッシュに笑子が反応する。

女医が背後のギャレーからリングをひと玉出してくると、ナイフで真っ二つに切り分けた。

片方の切り口から、今度は薄い板のように切り出すと、残った二つの半球の切り口を合わせて一つにした。

「・・・リングが犠牲者の体、薄いのが欠損部分。残った二つを合わせたのが、今あるご遺体。」

(5)

「——欠損した部分の厚さは？」

玲子が確認する。

「約 6 mm ってところ、ひとは脳幹が・・・もうひとは大動脈がその範囲に含まれた、それが致命傷ね。」

「大動脈が欠損して体外出血は無かったんですか？」

「多分、瞬時に周りの組織が癒着したのね、大動脈周辺の胸腔には、相応の内出血があったわ・・・。」

「——瞬時の癒着って、通常あり得ることですか？」

「ゴジラ細胞でもない限り、あり得ないわね。」

研究室の東の窓が、薄っすら白みはじめた。

「——ご加減如何でしょうか？ 大変な目にお逢いになりましたねえ。」

いたわるように玲子が声を掛けた相手は、まだ若い女性だった。

穴見の法医学研究室に隣接する大学病院の病棟である。

「受入れ当初は、両膝から下に反応がなくて壊死の可能性もあったのですが、今は軽度の内出血を残すまで回復しました、一晩でここまでの再生は経験がありません。」

ケーシー白衣の担当医が驚きの表情で説明する。

「両足に異変があったのですね。療養中に申し訳ありませんが、その時のこと詳しく話して貰えませんか？」

ボンヤリと朝の窓を見つめていた被害者が、向き直ってゆっくり話し始めた。

「車内ではいつもゲームをしていて・・・三原駅を通過すると、在来線と暫く並行して、急に空が暗くなって稲光が・・・新幹線の窓から遥か先に貨物列車が見えたんです。暫くしてトンネルを抜けると、真下を交差してその貨物列車が・・・先頭の機関車から、火花が立ち上がって架線を伝って私たちの車両まで届いたんです。」

「——バシッ！ って強い衝撃があって、両足に酷い痛みを感じて・・・立ち上がれなくて蹲っていると、周りのお客さんが集まってきて、座席に助け上げて寝かせてくれました。」

「3号車に乗られていたのですね？」

スマホ画面を見ながら笑子が尋ねる。

「自由席の一番端に座っていました・・・。」

「——台車のことをもっと詳しく訊かせてくれませんか。」

応接室のソファに腰を下ろしながら、奥寺が検修部門の幹部に尋ねた。

(6)

爽やかな朝日が差し込む車両基地事務所に、出勤職員の生き生きとしたざわめきが満ちてきた。

いつも通りの日常が始まろうとしている。

「——台車といますと？」

技術者然とした顔で、幹部が奥寺に訊き返す。

「全車鉄輪式の超電導リニアモーターに置き換えが完了したんですよね？」

「——その通りです。」

「超電導コイル本体は何処に設置されているんですか？」

「台車内に架装されています。回転式の交流モーターが無くなりましたので、車輪にトルクを伝える車軸も不要となり、台車枠内にスペースが出来ましたので、軌道間のリアクションプレートに対面する形で台車内に設置しています。」

「直上の客室は強い磁束に晒されると思うんですが・・・。」

「それはご心配なく、超電導コイルは底面だけ解放した金属ケースの中に挿入されています。パーマロイという合金で磁気シールド素材です、念のため直上の客室床の下地にも使用しています。」

「交流磁場による人体への影響は？」

「——あり得ません。」

自信ありげに言い切った。

「JR と鉄道総研は、鉄輪式超電導リニアを新幹線だけではなく、ゆくゆくは在来線にまで広げようと研究を進めています。台車から車軸を廃止したのもその一環で、標準軌用と狭軌用のダブル車輪を独立懸架で台車に架装し、直通運転を実現すべく努力を重ねています。」

「フリーゲージトレイン開発のリベンジですか？」

「軌道のクロッシング部とポイント部の、再設計と改修が必要となりますが、フリーゲージ台車より遥かに現実性があります。」

職員が各々の現場配置に就いたと見えて、事務所のざわめきが治まってきた。

「話は変わりますが、列車編成の総延長に最近ばらつきが出るって話を聞いたのですが・・・。」

同席している JR 幹部が顔を見合わせる。

「——何処から聞かれました？ 確かに、そのような事案の報告が在ることはありますが、ご存じの通り列車の連結自体それ程剛性の高いものではありません。測定した総延長に多少のばらつきが生じるのは、よくある事象です。」

三原市本郷町、沼田川に沿う県道を挟んで、新幹線と山陽本線が交差している。

線路沿いの空き地に停めたジムニーから、カップルと奥寺が降りてきた。

「トンネルを抜けて直ぐの場所ね、被害者の女性、貨物列車によく気が付いたわね。」

玲子が呟く。

「福山と広島間の新幹線を、通勤で使っていました。ここで貨物と交差するのはいつもの事だそうです。」

スマホのメモを見ながら、笑子が答える。

「当日の落雷に関して、調べてくれた？」

「当日同時間、この周辺で数か所落雷が記録されています。JR 貨物によると列車の緊急停車もこの先で発生しています。」

(7)

奥寺が頭上を指差しながら、「新幹線高架の側面と底面に、一部煤けた場所があります。多分在来線の架線か、機関車のパンタに落雷があったに違いないですね。」

そのまま山陽本線の土手を登り始めた。

「——鉄道施設内に入っちゃだめよ！ 奥寺君。」

玲子が大声を上げる。

「——許可は取っています、この時間 30 分程列車は通りません！」

土手の側面の叢を線路に沿って歩いていたのが、急に足を止めて屈みこんだ。

カメラを出して、盛んに撮影し始める。

——数週間後。

再び奥寺のマンション。

小さな円卓を囲んで玲子、笑子、奥寺、穴見がソファに腰を下ろす。

重々しい空気を振り払うように、玲子が口火を切った。

「みんな知ってるように、JR と運輸安全委員会の見解と、私たちの調査に多少の齟齬があるわ。ここでみんなの意見を聞いて、整理してみたいの・・・笑ちゃん、JR の見解は？」

「JR は直下を通過した貨物列車への落雷と、新幹線 8～9 号車間の貫通幌の故障を、事故の原因に挙げています。」

「——幌の故障は後で分かったことね。」

「事故から 3 日後に発表がありました、連結部を覆う貫通幌の一部に破断があって、客室内の気密が確保できてなかったようです。」

「JR はトンネル内の気圧変動と、幌からの漏気で、客室内が減圧されたと言ってます。」

釈然としない顔で奥寺が笑子を補足する。

「減圧された車両がトンネルを出たとたん、落雷した貨物列車からのライトニングサージを受け、客室内に異常な放電が生じて、2 人の乗客が感電した・・・。」

「——感電死じゃないわよ！」

穴見が眼を見開いて語気を強める。

「欠損した組織は、感電によって蒸発した・・・。」

「——あり得ない！」

「でも、減圧は本当だと思います。女性パーサーが、その瞬間、客室の空気が白くなったって言ってましたから。」

再び奥寺が笑子を補足する。

「総合指令所のモニターがアラームを表示したのは減圧のせいだと思います。ライトニングサージの衝撃で表示がリセットされた・・・。」

「——じゃ、3号車の被害者はどうなるの？ 3号車は減圧なかったんでしょ！」

女医を宥めながら玲子が、「——奥寺君、何か資料を持ってるんでしょ？」

奥寺がタブレットのアイコンを押すと、正面のモニターに新幹線の室内がCG表示される。

左下の小さなサブ画面にシート座面のささくれが拡大表示された。

「こういう不連続なテクスチャーが、室内を一周しています。不連続部位を面状に繋いでゆくと、車両を横断する1枚の壁が現れます。」

(8)

CGの客室を縦に切り分けて、フロストの掛った薄い壁が現れた。

「穴見先生から頂いたデータをもとに、犠牲者の頭部と胸部の欠損部分を、この壁に合わせて配置します。そして全身を合成すると・・・。」

頭を下げてシートに腰を下ろそうとする男性、シートに向かい前屈みに座面の何かを取ろうとする男性。

その瞬間の犠牲者たちの様子が、CGで再現されていた。

少し間をおいて、「——これは、事故現場で在来線との交差部を捜査したときの写真です。」

タブレットの画面を切り替え、数枚の写真を表示した。

「この四角は鉄道境界石、山陽本線のレールから5m程の位置にありました。コンクリート製で赤く塗られた頭部に漢字の“二”の字が見えます。ただ、カタカナの”エ”の字が本来で、中の縦線が欠損しているんです。」

「先日、うちのスタッフ総出で新幹線高架を詳しく調べて、橋脚コンクリートのセパ穴がD形になっているのを3か所見つけました。これも本来なら丸形ですから、一部欠損しているんです。」

「境界石とD形のセパ穴を結んだ線と、新幹線の軌道との角度が、客室に現れた壁の角度と正確に一致しました。」

「——つまりどういう事？」

玲子が鋭く訊ねる。

「つまり、犠牲者ふたりの体を欠損させたこの壁は、新幹線の車両を貫いて、コンクリートの橋脚や地上の境界石にまで達して、欠損させていたことになります！」

窓の外の足元の灯りが瞬き始め、上空の群青が一層深く沈み、部屋の空気もそれに倣って更に重くなった。

「まるで空間自体が、6mmの厚さだけ、滅失しちゃったみたい・・・。」

「——うまい表現だ。」

暗い顔の笑子の言葉に、奥寺が頷いた。

長い沈黙のあと、玲子が小声で呟く。

「——素人には理解できない話だわ、過去に事例があるの？」

「大戦中の 1943 年に、アメリカのフィラデルフィアで、強い磁場を使って駆逐艦一隻レーダーから消失させるという実験の話を、聞いたことが有ります。」

「——それで？」

「クーロン力の擾乱が起こって、物体が相互に嵌入し大騒ぎになったようで・・・但し海軍当局は、一切を公式には事実と認めていません。」

「その実験が、今回の事故と？」

穴見がソファーから身を起こす。

「物体の、空間上のボリュームを規定するのはクーロン力です。強い磁場によって特定の軸方向、つまりこの壁と垂直の方向に 6 mm の範囲でクーロン力が消滅したとしたら・・・山陽本線の直流磁場、新幹線の超電導交流磁場、更に落雷による誘導磁場、様々な磁場が事故現場に発生していた筈です。」

(9)

「犠牲者の体が前後に潰れたって、女性パーサーの話はこの事ね・・・。」

「6 mmの欠損、直後に癒着したと思ってたけど、組織の厚みそのものが無くなったって事？」

「貫通幌の破断も、その為でしょうね。犠牲者には、相応の内出血があったんでしょ？ 滅失した空間の前後が、うまく連続しなかった・・・。」

玲子、穴見、奥寺の順でしみじみ呟いた。

「———ねえ、今の話、ラボで検証できない？」

円卓の上の、冷え切った紅茶を一気に飲み干した玲子が、強い調子で奥寺に尋ねた。

奥寺は、それには答えず膝の上のタブレットを操作する。

「複雑な磁場の擾乱が、どういったメカニズムでクローン力を消滅させ、空間が滅失したかについては、専門外でここでとやかく言うつもりはありません。ただ、現場と似かよった条件で再現し、結果を検証するのは可能ですし SRI の仕事だとも思います。」

といいながら、複雑な実験装置の動画をモニターに映し出した。

大型の冷蔵庫のようなステンレスのチャンバーの中で、水平に固定された2 m程の塩ビパイプの両端から配線が伸びている、直下にそれと交差して太めのケーブルが空中に張られている。

「塩ビパイプを新幹線の車両と考えてください。パイプ下面には超電導コイルに見立てた交流コイルが固定されています。パイプに交差して在来線の架線同様に直流ケーブルを・・・実験室として尋常でない大電流を使用しますので、発熱対応で装置全体を冷凍機で冷却します。」

「———パイプの中が光ってるのは？」

モニターに喰い入りながら笑子が尋ねる。

「レーザー測距装置だ、実験前と後とでパイプの長さを精密に測定する。」

「———それでどうだった？ パイプは短くなったの！」

女医が興味深げに身を乗り出す。

他の二人も目を見開いて奥寺の言葉を待った。

「パイプが軸方向に振動しているのが観測されました。」

「———短くならなかったの！」

がっかりした色が全員の目に現れた。

奥寺はそれに構わず、「非磁性体の塩ビパイプが、磁場で振動する筈はありませんから、これはクーロン力の振動です。実験室で再現できる磁束密度には限界がありますから、空間の滅失まで至らないのだと思いました。」

「更に面白いことに、パイプ振動の周期が交流磁場のそれと一致したんです。そこで、電圧と周波を調整して、パルス状の交流をコイルに流したんです。」

「——そしたら！」

女医が再び、恐ろしい表情で身を乗り出す。

「そ、そしたら・・・1/1000 mmに過ぎませんが、パイプが短くなりました。更に発雷装置によって装置の中で大気圧放電を起こすと、1/100 mm短くなりました——。」

(エピローグ)

——数か月後。

「交通大手へのハッキングが、最近酷いらしいわね。」

舟入本町のカップルのマンション、非番の週末である。

「悪意のハッキングは“クラッキング”って言うらしいですよ。」

笑子が紅茶ポットを準備しながら応える。

「新幹線総合指令所のシステムに侵入されたんだって、ダイヤ管理や運行システムに支障が出ないか大騒ぎらしいわ。」

「運転士乗ってないもんね～。何かあったらどうすんでしょ？」

「一番怖いのは、車両制御システムへの侵入だって、奥寺君言ってたわよ。VVVF インバーターを外部から操作されると、そこら中で事故が起きるって……。」

「———何ですか VVVF？」

「新幹線の動力制御の要なんだって、リニアモーターへの電圧と周波数を制御するんだって。」

「じゃ、その VVVF 何たらで、この前みたくパルス交流も作れるんですか？」

「そう！ 出来るんだって———。」

「でも、システムのハッキングだけじゃ無理。列車の遅れとか、下を通る貨物列車とのタイミングだとか、現地で様子を見ながら調整する必要があるんだって……。」

眼下の銀杏並木が黄色く色付き、遠くの山肌に、晩秋の気配が深まってきた。

「あなたの考えてること解るわ。被害者の女性、車内でずっとスマホゲームしてたって言ってたわね。」

「通勤で毎日利用してたから、何がどのタイミングで起きるのか、よく解ってたんじゃないですか？」

「貨物列車への落雷だけが想定外で、それで両足に怪我をした。でも、あの女性が JR のシステムに侵入出来るとは思えないけど……。」

「犠牲者ふたりとの関係を調べてみましょうか？」

紅茶を啜りながらゆっくり考える。

やがて顔を上げた玲子が、「やめときましょ、何れにしたって空間滅失のメカニズムが説明できなきゃ、逮捕も立件もできないわ。」

「それよりあなた、ゆうべ“あれ”のモードを脈動（パルス）に設定してたでしょ！ 朝まで頭痛かったわよ。」

『仰け反りかえって喜んでたくせに・・・。』

聞き取れない笑子の眩きが、穏やかで微笑ましかった。

——おわり——

本作品はフィクションであり、実在の個人・団体等とは一切関係がありません、悪しからずご了承ください。

尚、表紙に使用しました写真は“Photo AC”様より転載させて頂きました。

新幹線

著 南海部 覚悟

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
